

次にこの三心について検討したい。

第二項 三心について

聖光の現存している著作のほとんどに三心についての解釈がなされていることを見てわかるように、聖光はこの三心を非常に重要視していた。これは例えば『末代念仏授手印』（以下『授手印』）（『昭和新訂三卷書』授菩薩戒儀『三〇頁』）には「仰リモツモノ此宗一大事ハ此三心也」とあるのを見ても明らかである。また、それらの著作における三心論は一貫性があり、時には法然のように平易な解説を付け無智の凡夫を意識したものになっている。

聖光の三心論の論点は（一）法然からそのまま継承しているもの、（二）法然の説を細釈したものの、（三）法然の説をさらに発展させて独自の見解を示したものに分類できるであろう。（一）については智具の三心・行具の三心の思想であり、また本願の三心がこれにあたる。（二）については至誠心・深心・回向発願心について細釈し散心の念仏における往生の可否を論じていることがこれにあたる。（三）については行具の三心の思想を別の見方で横堅の三心を定義し、法然が明確に示さなかった五念門の作願門・回向門を三心に含め、さらに『阿弥陀經』の一心と三心の関係を明確にしたことがこれにあたると思う。

次に聖光の三心論の論点について検討していきたい。